

## 相づち表現「だから」の使い分け

真 山 季実子

### はじめに

方言は、共通語・標準語に対して、ある地方で用いられる特有のことば、または特定の階層に用いられる独自ののことばである。加藤（1988）が指摘するとおり、現代の地方人は、方言と共通語の二重生活を営んでいる場合が多い。最近では、地方育ちの土着の人でも共通語しか話さない人をかなり見かけようになり、逆にその方言しか話せないという人はいなくなったようである。そのため、一般の地方人は、改まった場合や他地域の人と話す場合は共通語で、土地の人同士でくつろいで話すときには、方言そのものか、方言的な色彩のある話しぶりをするという人が多くなっている。また、方言と共通語は、外国語同士の切り替えと違って、両方の要素を適当に配合することが可能であって、その調合の度合いの判断が話し手の良識にまかされるため、場面的に割り切れない難しさがあると同時に、その言語自体も境界の難しいものが多い。そのため、佐藤亮一（2005）も指摘するように、現在では、老いも若きも方言と共通語を場面に応じて無意識に、しかも巧みに使い分けている。

方言といっても様々な見方がある。例えば、時間の軸からみると古くから使われているものを「伝統方言」といい、逆に新しく発生したものを「新方言」と呼ぶ。また、共通語との関わりからみても、一般的な方言に対して、共通語との接触によって生じた「中間方言」や「ネオ方言」と呼ばれるものがある。あるいは、使用者の認識の差をもとに、方言らしい方言と、そうとは知らずに使っている「気づかない方言」がある。

方言は共通語ではないため、使用者が気づきやすいものだと思うられるかもしれないが、使用者で普段から意識してことばを使う人はほとんどいない。そのため、使用者がある方言に対して常時使用している場合、気づかれにくいものがほとんどである。特に気づかれにくい理由としては、方言の形態があげられる。方言には、共通語にはない形式のものと、共通語にある形式でありながら、その意味や使用法に地域的な違いがみられるものがある。

そのため、様々な地域の人との交流が増えるに当たり、初めて方言だと気付くものがしばしばある。なかでも、共通語と形式が同じものは、方言であってもそれを使用している地域では、なかなか方言だと気づかれない。そのため、佐藤祐子（2003）で指摘されるように、方言話者が方言という意識を持ちにくく、「気付かない方言」や「気付かれにくい方言」など様々な名称で呼ばれている。そのようなものとして、仙台方言の「ダカラ」がある。その「ダカラ」が共通語とは異なり、どのような場で使用され、どんな意味が含まれているのか疑問に思い、とりあげることにした。

## 第1章 共通語のダカラの意味用法

仙台方言の「ダカラ」の意味についてみる前に、まず共通語の「ダカラ」の意味を把握しておく。「ダカラ」とは、前文の叙述を受けて、それを代行する助動詞「だ」に接続助詞「から」が結合し、更に自立語化し、順接の関係を示す接続語となったものである。

井出（1973）によると、接続詞とは、

単独で一文節をなし、活用がなく、主語にも述語にも修飾語にも被修飾語にもならず、間投助詞以外の助詞をつけないもので、機能的には、前の文、または語の意味を承けて、之を後に来る語や文に続けるものであって、これによって、前の文や語と後の文や語とがどんな関係でつながるかを示すものである

とし、接続語を対等の関係を表すものと従属の関係を表すものの二つに分類している。そして、「ダカラ」は後者の従属の関係を表すものとしている。

接続語における「ダカラ」は、先行の事柄の当然の結果として起こること、または原因・理由になる意を示す。話し相手の発言内容や置かれた状況を前提にして、「だからね・・・」と発話的に用いたり、「だから言ったじゃないか」と自分の発言が話し相手の今の状況を予想して注意を促すように用いたりする。また、共通語「ダカラ」は、書きことばとしても話しことばとしても用いられるが、主に書きことばとして使用されることが多い。共通語の「ダカラ」は以下のように使用される。※使用例はグループジャマシイ（1998）を引用。

（1）踏切で事故があった。だから、学校に遅刻してしまった。

この「だから」は、前の文を原因・理由・根拠として、そこから結果とし

て導き出される帰結を述べる場合に用いる。後の文には事実を述べる文ばかりでなく、推量・依頼・勧誘など、様々なタイプの文が続く。丁寧な形としては、「ですから」がある。

また、同じ帰結の形としては次のパターンがある。

(2) A：今夜は雨になるそうですね。

B：だから、私、傘を持って来ました。

これは、会話の場合で、理由と帰結を二人が分担して述べるような用法。

(1) では、一人で理由と帰結を述べているが、(2) のように二人が分担しても活用することができる。

(3) A：今日は加藤先生、休講だそうだよ。

B：ああ、そう。だからいくら待っても誰も来ないわけか。

これは、「だから・・・のだ／・・・わけだ」という形で活用されている。ある事実が分かったときに、そこから導き出された当然の結果だと納得する気持ちを伴って現状を表すのに使う。会話の場合は、相手の発言で、原因・理由が明らかになったような場合に用いられ、文末には確認の「ね」や納得を表す「か」を伴う。「だから」の最初の音に強勢がおかれ、強くやや長く発音される。

(4) A：できることは全部やったつもりです。

B：だから、何なんですか。

この「ダカラ」は、(1) の帰結とは異なり、会話の用法で「だから」の後に質問が続く。これは、因果関係を表すのではなく、聞き手の発言を受けた際、「だからあなたは何が言いたいのか」と、相手の発言意図をはっきりさせようと要求する用法。そのため、「それで」「で」で置き換えることができる。

(5) A：たった一度会っただけだよ。

B：だから？

これは、(4) と同じ質問を表している。ところが、発音に関しては上昇調で発音され、後半が省略されることもある。失礼なニュアンスがあるため、この用法では、文末が丁寧体であっても「ですから」は使用しにくい。

(6) A：ちょっと、どういうことですか。

B：別に特別のことはないよ。

A：だから、どういうことって聞いているんだよ。

(6) は、会話の中で主張を表す用法。因果関係を表すのではなく、聞き手と意見の食い違いなどがある場合、「私が言いたいのはこういうことなのだ。」と話し手の発言意図を聞き手に理解させようとするときに用いる。

(7) A：何で電話してくれなかったの。

B：だから、時間がなかったんだ。

(7) は、(6) と同じ主張を表すのだが、ここでは言い訳をする場合の用法として使われている。自分の主張を強く表現するため、押し付けがましく失礼なニュアンスを伴うことが多い。

以上の分析から、共通語「ダカラ」は、前文があって初めて使用することが出来る。それを表したのが図1である。

人数	用法
一人	<span>前文</span> + 「ダカラ」 + <span>理由・原因</span>
二人	A： <span>前文</span> B：「ダカラ」 <span>理由・原因</span>

図1 共通語「ダカラ」の用法

パターンとしては、会話の中で、一人で使用するものと二人で文を分けて使用するものの2つがある。

一人で使用する場合、必ず前文 + 「ダカラ」 + 理由・原因となる。二人で使用する場合は、一人目の会話を前文と考えて、二人目がそれに理由・原因を述べる場合に発話的に使用する。最終的に、「ダカラ」を使用することにより、前文に対して理由・原因・根拠・結果・意見を明白にすることができる。

類似の接続詞に、「したがって」「よって」「(それ)ゆえに」などがあるが、「だから」が専ら口頭語として用いられるのに対して、これらは口頭語として用いられるのはほとんど無い。特に、「よって」は表彰状など形式的な公的文書など、客観的で論理的な論証するような文章に用いる。そのため、その場合には「だから」を用いることはない。

## 第2章 仙台方言ダカラの意味用法

仙台市方言における「ダカラ」は、話し相手のあいづちとして使用される。したがって、ここでは、まず、筆者が行った面接調査の結果をもとに、あいづちとしての仙台方言「ダカラ」の意味分析を行う。仙台方言「ダカラ」は、次のように使用される。

(8) A:「レポート終わってない。ヤバイ。」

B: (同じく終わっていない、ヤバイと思っていた)

「だから…全然やってない。」

(9) A:「テストとっても難しかったね。」

B: (難しいと思った)「だからね。」

(10) A:「昨日のテレビ見た?あの人格好良かったよね。」

B: (格好良いと思った)「だからだから。」

以上の使用例は、最初の発話者の発言に同意・共感・同感・同調した場合に用いられる。琴(2005)によると、仙台市方言は、情報の共有を積極的に相手に働きかけながら談話を展開する方言である。また、談話の開始においても途中においても、常に発話権が自分(話者)にあることをアピールしながら話を進める方言であると指摘されている。その点では、発話者の発言に同意を表すことは談話展開における仙台市方言の典型的なものであるといえる。

(8)の場合、ここでは、同感を表す。

(9)の場合、「ダカラ」の語尾に「ね」が付き、「だからね」となっているが、この語尾「ね」は、他者への働きを表している。また、仙台市方言の「ダカラ」は同意を求めている。

(10)の場合、Aがテレビに映る人を格好良いと思い、Bもそれに対し、格好良いと思ったのだから、Aに対し同感を覚えている。このときBは「ダカラ」を一回だけ使用するだけで良いのだが、「ダカラダカラ」と「ダカラ」を二回繰り返している。これは、繰り返すからといって(8)や(9)と意味が異なるわけではない。

仙台市方言の「ダカラ」は、書き言葉が主要な共通語「ダカラ」とは異なり、話し言葉として使用される。仙台市方言「ダカラ」は話し相手がいて始めて使用することができる。では、なぜ仙台市方言「ダカラ」を一回使用するだけで意味が伝わるのに、わざわざ二回つなげて使用する必要があるのだろうか

か。

筆者が面接調査をした、20代の調査対象者によると、テンションが上がり、気がつく「ダカラ」を二・三回繰り返しているそうだ。もっと詳しく尋ねてみると、こんな理由が見えてきた。理由としては、「ダカラ」を二・三回使用するの、話し相手との会話を盛り上げるためであるという。「ダカラ」を一回使用するよりも、二回続けて使用するほうが、イントネーションが上がり、会話がはずむ。そのため、「ダカラ」の後に、様々な内容を気軽に入れることが出来る。このことから、二回続けて使用するほうがテンションを上げたまま、さまざまな内容の会話を盛り込むことができ、二人の会話に弾みと楽しさを与える効果があると考えられる。

以上の分析から、仙台方言「ダカラ」は、相手がいて初めて使用することが可能であることが分かった。つまり、相手がいないければ使用することは出来ないのである。

それを表したのが図2である。

形 式	用 法
基本形	A : <span style="border: 1px solid black;">前文</span> B : 「(前文に対して同意の場合) ダカラ」
応用 1	A : <span style="border: 1px solid black;">前文</span> B : 「(前文に対して同意の場合) ダカラ」 + 「ネ (情報共有確認)」
応用 2	A : <span style="border: 1px solid black;">前文</span> B : 「(前文に対して同意の場合) ダカラ」 × 2 (テンションが上がっている場合)

図2 仙台市方言「ダカラ」の用法

共通語「ダカラ」と同様に、使用するパターンは二つある。共通語と異なる点は、必ず話し相手がいなければならない点である。仙台方言「ダカラ」は、相手のことばに同意、または相手のことばが正しいと思ったときに使用される。そのため、一人では使用することができない。

基本的な形式では、まず、話し手Aが会話を持ち込むことで始まる。次に、聞き手Bが話し手Aに対し、同意、または正しいと思えば「ダカラ」を用

いるのである。そこで会話が終わったり、会話が続きたりする。

応用1では、基本形とほとんど変わらないが、聞き手Bの「ダカラ」の語尾に「ネ」がつく。琴(2003)は、

「ネ」は感動詞、間投助詞、終助詞の三つの品詞にまたがる  
と述べ、それにより、念押し(感)と情報共有確認(感(終))、引き込み(間(終))のどれかに当てはまるが、「ダカラ」は同意を示しているため、ここでは情報共有確認の「ネ」が使用される。それにより、相手の会話に対し、より一層同意を示している。

応用2では、話し手Aは変わらないが、聞き手Bが相手(話し手)との会話を盛り上げるために「ダカラ」を二回続ける。つまり、「ダカラダカラ」となるのである。その後は、基本形と同じく、会話が終わったり、会話が続きたりする。しかし、「ダカラ」を二回使用する応用2では、会話を盛り上げる効果があるので、会話が途切れる場合は少ない。つまり、仙台方言「ダカラ」を使用するパターンは、話し手Aは変わらず、聞き手Bの気持ちにより変わってくる。

図1と図2を比較してみると、共通語「ダカラ」を二人で使用する用法と、方言「ダカラ」の用法の形式が非常によく似ているということが分かる。

では、「ダカラ」の使用者は、方言特有の用法の「ダカラ」や共通語の用法の「ダカラ」に対してどのような意識を持っているのだろうか。

### 第3章 アンケート(仙台方言ダカラの確認)

仙台方言「ダカラ」について、各年代に分けて簡単なアンケートを実施した。対象は、仙台市に在住、または、通勤、通学している人である。調査の目的は、①方言「ダカラ」と共通語「ダカラ」の言語意識、②方言「ダカラ」を使用する相手、③方言「ダカラ」の使用する場合を知るためである。

具体的な質問項目は以下の3項目である。

質問1. 例としてあげた文の「ダカラ」は共通語か方言か

質問2. 誰との会話で主に使用するか(友人、家族など)

質問3. どの場面で使用するか

※女65名、男4名、計69名、内10代31名、20代26名、30代以上15名

アンケート調査の結果を報告する。

回答1. 共通語と方言の区別

まず、はじめに、方言話者が、方言特有の「ダカラ」に方言という意識（以下、方言意識）を持ち、共通語の「ダカラ」に共通語という意識（以下、共通語意識）を持つのであれば、それぞれの「ダカラ」は異なる文体もしくは場面で使用されるべきものとして意識されている、もしくは、同音異義語として認識されている可能性が考えられる。しかし、もし共通語の用法と方言特有の用法に対する言語意識が一貫しているのであれば、方言話者にとって仙台市方言「ダカラ」は、共通語の用法と方言特有の用法を持つ多義語として認識されているとも考えられる。

今回の調査では、「ダカラ」を用いた共通語の用法の例文（接続詞的な「ダカラ」を代表させた）と方言特有の用法の例文を示した上で、それぞれの用法の「ダカラ」が共通語か方言か尋ねた。調査結果をグラフにしたのが図3である。共通語の用法の「ダカラ」と方言特有の「ダカラ」を同じ言語意識、すなわち共通語か方言かで一括する人の割合を世代別にまとめた。

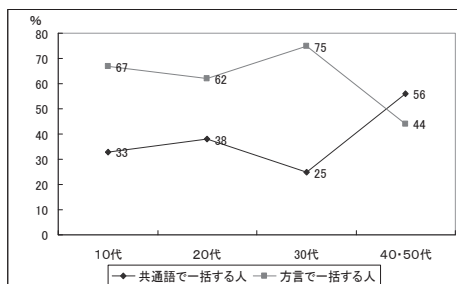


図3 「ダカラ」の言語意識  
～共通語の用法と方言特有の  
用法を同じ意識でとらえる  
人の割合～

年代に関わらず、全体的に見ると、全体の約60%は、共通語か方言かをきちんと区別することが出来ていることがわかった。しかし、残りの約40%は、一部の用例に関しては方言と共通語の意味を混合している。

興味深いのは、方言特有の「ダカラ」と共通語の「ダカラ」を一括する言語意識に世代差があることである。方言という意識で一括する人は、30代が75%であり、この世代が一番方言の用法としてとらえている結果となった。次は10代67%、20代62%と続き、40・50代以上で44%と一気に下がる。それに対し、共通語という意識で一括する人は、10代で33%、20代で38%、30代で25%であり、40・50代以上で56%と一気に上昇する。このような世代差が生じた原因は、方言「ダカラ」の使用の有無によるものではないかと考えられる。



では、アンケート調査で行った用例ではどのようなものに言語意識が分かれたのだろうか。

きちんと方言と認識された用例と方言と共通語の意味を混合された用例とは、以下の通りである。また、( ) 内の数字は誤答した人数である。

●正しく方言と認識された用例

1. A: 今日のテスト難しかった  
B: だから…全然勉強してないのに。
2. A: いい天気だね。  
B: だから! 洗濯日和だし!
3. A: 昨日の向井くんカッコよかった!  
B: だから! 超やばかった!
4. A: なんでこんなに地震が多いんだろうね。  
B: だからね。

●方言と共通語の意味を混合している用例

1. A: 今夜は雨になるそうですね。  
B: だから、私、傘を持って来ました。(8)
2. A: あの子とはたった一度会っただけだよ!  
B: だから? (5)
3. A: ちょっと、どういうこと?  
B: 別に特別のことはないよ。  
A: だから、どういうことって聞いているんだよ。(2)
4. A: なんで電話してくれなかったの?  
B: だから、時間がなかったんだ! (3)

これらを比較すると、両者の共通点と相違点が見えてくる。

共通点は、どちらもBの会話が「だから」から始まっていることである。このため、「ダカラ」は聞き手の会話の初めに表れるために、後者も方言「ダカラ」であると誤認されたのではないか。次に、相違点は、前者は全て、同意として使用されており、後者に関しては、全て説明する場面で使用されていることが分かる。※後者の1=あやふや表現。

では、なぜ、後者は方言として考えられたのか。

琴(2003)では、情報を効果的に伝えられる談話標識として、仙台方言では、仙台市方言話者が説明的場面において「ダカラ」を他の談話標識よりも

多く使用しているとし、発話権の取得・維持を明確にしていると述べている。それは、説明的場面における高年齢層話者の使用について考察した結果であった。仙台市方言の説明的場面で使用される「ダカラ」の談話標識とその機能については、以下の通りである。

＜表 1＞ 仙台市方言の説明的場面で使用される  
談話標識「ダカラ」とその機能

代表形	具体的形式	機能
ダカラ	ダ、ダー、ダカ、ダカラ、ダカラー、 ンダカラ、ンダカラー、ダガ、ダガラ、 ンダガラー、ダーラ、ンダラ、ンダーラ、 ダケ、ダッケ	発話権取得 発話権維持

琴（2003）は、仙台市方言の談話展開の方法を明らかにした結果、仙台市方言話者は「ダカラ、ネ、サ、ヤハリ、ホラ、デショー（↑）、ネ（↑）、ヨネ（↑）、ツチャ、ツチャネ（↑）、ウン、エ」などの談話標識を頻繁に用いることによって、発話権の取得や維持をハッキリ表明し、情報の共有を前提にしていることを明示、情報の共有を要求・確認し、かつ、自分が展開する話の世界を相手が理解したかも確かめながら、さらに、そこまでの話を自分の中で整理して自分で確認し、そうすることで相手も納得させながら話を進める

という結論に達した。

そのため、共通語であるにも関わらず、方言と共通語の意味を混合してしまったのは、仙台市方言話者にとって説明的場面において、談話標識「ダカラ」を会話の初めに多く使用していること。また、「ダカラ」を使用することで発話権を取得・維持していることがあげられる。

## 回答 2. 使用する相手

使用の有無で、使用すると答えた人に仙台市方言の相づち的な「ダカラ」を使用する相手はどういう人が質問を行った。筆者が当てたいくつかの項目を選んでもらったが、使用する相手は年代によってはあまり変わらなかった。そのため、どの相手に多く使用するのかをまとめた。その結果が図 4 である。

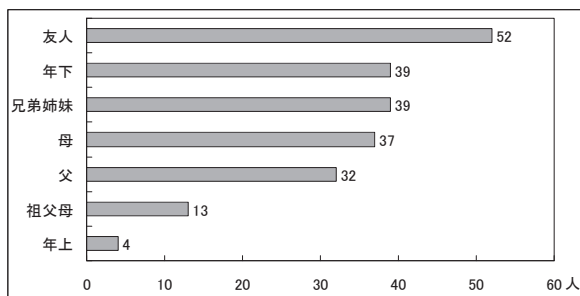


図4  
仙台市方言「ダカラ」を使用する相手

この図から、友人への使用が一番多いことが分かる。そして、兄弟姉妹、年下、次に母、父、祖父母、年上という順になっている。兄弟姉妹に関しては、対象者にいるかいないかによるが、いる人のほとんどが兄弟姉妹相手に使用していると答えた。両親については、アンケートの対象者の多くが女性だったためか、父親より母親への使用が多かった。祖父母への使用は、兄弟姉妹と同じでいるかいないかにもよるが、祖父母へは使用しないと答えた人が多かった。

対象者の多くはあまり意識していないようだが、祖父母と話すときは、方言「だから」ではなく、「そうなの」などの標準語で伝えている。

最後に一番少なかったのは、年上に対してである。項目上、年上としたが、友人のように親しい間柄では、年上でも使用するという意見が多くあった。しかし、それ以外は目上の人に対して方言「ダカラ」を使用すると失礼に当たるといった意見や、敬語を使用する場合では、方言「ダカラ」は使用しないという意見があり、年上である祖父母に対しても同じことが言えるであろう。

これにより、方言「ダカラ」は、気軽に話することが出来る相手、敬語を使用しない相手、つまり、心理的に近い間柄の相手にのみ使用されることが考えられる。

### 回答3. 使用する場面

次の質問では、方言「ダカラ」はどういったときに使用しているのかを尋ねた。その結果が図5である。

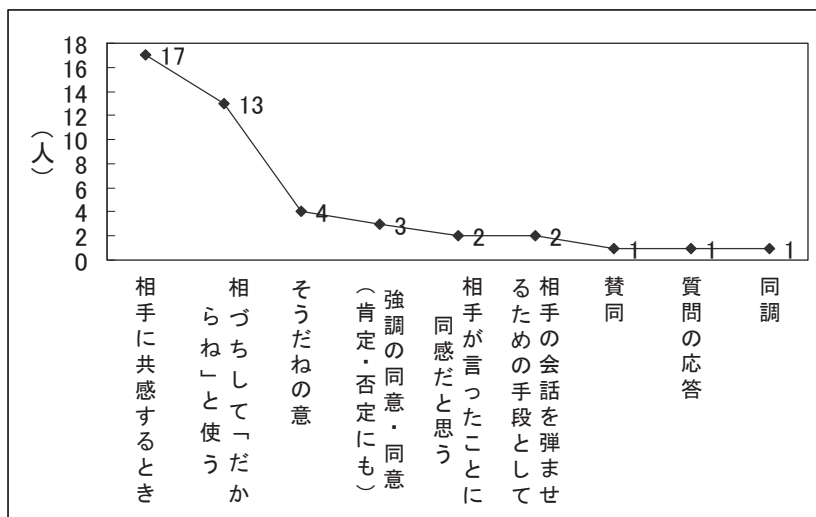


図5 どのように使用しているか

この結果をみると、やはり、相手に共感するときに一番多く使用していることが分かった。次に相づちとして「だからね」として使うとある。また、内容が肯定的・否定的関係なく、相手が言ったことに共感・賛同・同感・同調した際には、方言「ダカラ」を使用していることが分かった。

#### 第4章 仙台方言ダカラの発生

仙台では、昔から『んだ』＝「そうだ」という相手の言ったことに対して、その通りだという気持ちを表す相づち表現が使われていた。これは隣の県、岩手県でも使用されている。また、そうだねという意で「んだっちゃ」、そうではなくてという意で「んでねくて」などが使用されていた。これら全ては相手が今話していることを指している。仙台方言では、感動詞の「ン」があり、相手の意向を了解、または承諾したことを表す語として使われていた。そのため、了解・承諾を意味する「ン」は、仙台方言では以下のように使用されていた。

- ・んだねや＝そうだね                      ・んだね＝そうですね    ・んん＝はい
  - ・んだから＝そうね、だから    ・んでがすとも＝そうですね
- 「うん」の「ン」は、浅野（1985）などによると、

信明集「今日のうちに否とも言い果てよ人頼めなる事なせられそ」や、日葡辞書「ウム、 自分に向かって言われたことに同意するとか、それを了解したとかを示す感動詞」のように、承諾を表す語として極めて古いことばとされている。

また、日葡辞書で「ウム」とされているが、「ン」は助動詞「ム」が平安時代中頃からその発音の変化に伴って「ン」と表されるようになったものとされている。

そして、「んだ」は、「フダ」「ホダ」とも言う。そして、強調するときは重ねて使用される。このことから、ダカラを二回続けて使用するとき、内容を盛り上げるためでもあり、強調するためであることが分かる。

その延長線として、「んだから」ということばも使われていた。「んだから」は、そうなの、または、そうそう、私もそう思うという意味として使用され、相手のことばに同意したとき、また、相手のことばが正しいと思ったときに使用されている。

藤原(1996)では、「んだ」は、そうだ。または、そうです。の応答辞とされている。奥州地方では、よく使用され、「ンダ。ンダ。」(そうだ。そうだ。くそうです。そうです。く)のように言われることも多い。これは、老若男女にこの返事ことばがよく聞かれる。山形県西南岸でも、「そうです。」という意味で「ンダ」は使用される。また、近畿南半域でも、「ンダー」というのが聞かれる。徳島県下でも、「ンダ」がよく使用され、鹿児島県薩摩などにも「ンダ」がある。これらは、いわゆる発語ふうのものであって、奥羽地方でのようなダ助動詞に関わるものではない。感声ふうの、いわゆる発語がこのようにおこなわれている。先ほど述べた、鹿児島県薩摩では、あらまあの意として、「んだしたもん」(感動詞)が使用されている。「んだしたもん」は、女性が使用するもので、「んだ」は「私は」という説と感動詞という説がある。秋田県では、宮城県の「ダカラ」と同じく、そうだね。の意として、「ンダカラ」が使用され、秋田県南部の八島地方では、「そうでしょ?」の意味で「ンダンダ ホ。」と使用されている。秋田県の「ンダカラ」の使用例は以下の通りである。

例 A:「今日さびなー(=今日は寒いなあ)」

B:「んだから(=そうだね)」

この秋田県で使用される「ンダカラ」の使用例をみると、仙台市方言

の「ダカラ」の使用例と同じであることに気がつく。「ンダカラ」の意味が「ダカラ」と同じ意味であることを考えると、「ンダカラ」から「ダカラ」へと変化したものと考えられる。

宮城県出身の70代と80代の女性2名に面接調査を行ったところ、「んだから」はよく使用しているということであった。例えば、子どもに以前から部屋で走ると転ぶので走らないようにと注意を促していたが、その後、子どもが部屋で走り、やはり転んでしまった場合、「んだから言ったでないの!」と、「んだから」を「そうだから」という意味で使用しているという。しかし、この場合の「ダカラ」は、共通語の接続詞として使用されている話し相手の発言内容や置かれた状況を前提にして、「だからね」と発話的に用いる「だから」を訛ったものと考えられる。そのため、仙台方言として以前からあった、「そうだ。」の意味の「んだ」と「そうだから」の意味の「んだから」が混ざり、「そうだね。」の意味になり、仙台の方言として定着したものではないかと考えられる。使用されていくごとに、「ンダカラ」の「ダカラ」の前の「ン」が、省略され、「ダカラ」になったのではないかと考えられる。そのため、秋田方言の「ンダカラ」は、「ン」が省略されることなく方言として残っていると思われる。

これを踏まえて、共通語の「ダカラ」と仙台市方言の相づち的な「ダカラ」の通時的な関係について考察する。図1と図2を比較してみると、共通語の「ダカラ」と仙台方言の相づち的な「ダカラ」には、共通点と相違点がある。共通点は、どちらも聞き手Bの会話が「だから」から始まること、相違点は、方言「ダカラ」は、同意の場合に使用されており、共通語「ダカラ」に関しては、説明する場面で使用されるということである。また、秋田方言である「ンダカラ」の意味や使用用法から、仙台市方言「ダカラ」と使用用途が同じであることが分かった。

小野(1996)は、方言の世代による言語変化は、1世から2世、または3世までは受け継がれるが、3世または4世では共通語化していくと示している。また、3世または4世で全て共通語化するのではなく、新しくことばを取り入れることで少しずつ変化するとも考えられている。最近では、テレビの影響もあり、若者を中心に東京式化への傾向もみられるという。

小野(1996)に当てはめると、図6のようになる。

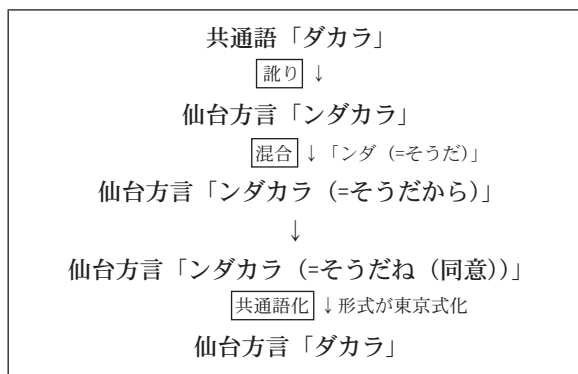


図6 仙台方言「ダカラ」の言語変化

仙台方言「ダカラ」も、もとは、共通語「ダカラ」が訛り、「ンダカラ」というようになる。その後、もともとあった、仙台方言「ンダ (=そうだ)」が混ざり、「ンダカラ (=そうだから)」へと、意味が変化した。ところが、テレビの影響などで東京式化、つまり共通語化していき、意味は変化した「そうだね。」のまま、形のみ共通語「ダカラ」に変化したと考えられるのである。そのため、もともと共通語だったものが様々な派生により方言になったのだが、形式が共通語化したため、方言という意識が持ちにくく、「気づかない方言」となった可能性がある。

## おわりに

前章（第4章）により、仙台市で使用される相づち的な「ダカラ」は、共通語の「ダカラ」が基盤となり、様々なことばの影響を受け、言語変化、また方言の共通語化の結果生じたものと結論付けられる。

本稿では、仙台市方言の相づち的な「ダカラ」は、共通語とは異なり、どのような場で使用され、どんな意味が含まれているのかをみてきた。ここでは面接調査やアンケート調査など、以上の結果を総合し、仙台市方言の相づち的な「ダカラ」の特徴を整理したい。

使用する場面は、次のような場面で使用される。それは、最初の発話者の発言に同意・共感・同感・同調したとき、相手のことばが正しいと思ったときである。特に、相手の会話に同意を表す場面で使用される。それは、琴(2005)が提示する相手への情報共有の働きかけ、つまり、情報の共有を積極的に相

手に働きかけながら談話を展開するという仙台方言の特徴が現れている。また、相手との会話をはずませる手段として（無意識に）使用される。そして、同意の「そうだね。」という意味で使用される。

使用する相手は、なんでも話せる友人に特に使用される。次に、兄弟姉妹・年下に使用され、母、父、祖父母など家族が続く。すなわち、心理的に近い間柄の相手に使用される。つまり、会話に同意しないときや心理的に遠い関係、親しくない相手や敬語を使用する相手、自分より目上の人に対しては、方言「ダカラ」を使用すると失礼にあたり、敬語を使用する場合には、方言「ダカラ」は使用しないからである。このように、使用する場面や使用する相手を調べてみると、仙台市方言「ダカラ」は、やはり同意を表す相づち表現で、心理的に近い間柄で使うことができると判断することができる。このことから、心理的に近い間柄では気軽に使うことが出来ると分かったが、その反面、親しくない相手や敬意を表す相手に使用すると、失礼にあたるということも今回の調査で分かった。

以上のことから、仙台市方言「ダカラ」には、以下の使用するための条件があると判断できる。

- ・二人以上で会話＝話しことば
- ・相手の話に同意、同感、同調したとき
- ・会話の返答、またはあいづちをうつとき
- ・相手の会話が共通の事柄（共通認識）となること
- ・話し相手が自分と心理的に近い関係にある場合

今回調査を行ってみて、今まで意識していなかった仙台市方言「ダカラ」について詳しく知ることが出来た。先行研究が少なかったため、自らアンケートを行ったり面接調査を行ったりと大変だったが、仙台市方言である相づち表現「ダカラ」について追認することが出来たと思う。しかし、仙台市方言「ダカラ」について調査を行ったが、男女の比率や高齢層の情報の少なさが数値に影響を与えている可能性もあるのではないかとと思われる。

## 参考文献

- 『日本国語大辞典 第二版』（2001）第8巻 小学館  
 浅野健二(1985)『仙台方言辞典』 東京堂出版  
 井出 至(1973)「接統詞とは何か―研究史・学説史の展望―」『品詞別日本文法講座 接統詞・



感動詞』明治書院

小野米一(1996)「移住と方言」『方言の現在』明治書院

加藤正信(1988)「方言と共通語」『講座 日本語と日本語教育』明治書院

琴 鐘愛(2003)「仙台市方言における談話展開の方法—説明的場面で使用される談話標識から見る—」『文芸研究』155

———(2004)「仙台市方言における談話標識の出現傾向」『国語学研究』43

———(2005)「日本語方言における談話標識の出現傾向—東京方言、大阪方言、仙台方言の比較—」『日本語の研究』1巻2号

グループジャマシイ(1998)『教師と学習者のための日本語文型辞典』くろしお出版

佐藤祐希子(2003)「「気づかない方言」の意味論的考察—仙台市における程度副詞的な「イキナリ」—」『国語学』54巻1号

佐藤亮一(2005)「地域社会における方言使用の現状と将来」『表現と文体』明治書院

田村 昭(1966)『仙台方言集 東北の方言』仙台宝文堂

中田祝夫(1983)『古語大辞典』小学館

平山輝男(2001)『日本のことばシリーズ3 岩手のことば』明治書院

藤原与一(1997)『日本語方言辞書—昭和・平成の生活後—』東京堂出版